

# 沿岸性重要貝類の資源造成技術開発（バイ）

（増養殖試験研究事業）

道根 淳

## 1. 研究の目的

以前、県内でもまとまって漁獲されていたバイは、漁網防汚剤や船底塗料の主成分である有機スズの影響により雌個体に雄化現象が見られ、正常な生殖行動が行われず、これが一因となり資源が壊滅状態となった。その後、有機スズの使用禁止により、近年、漁場の環境改善がなされ、資源回復の兆しが伺える。そこで、親貝の移植による放流技術開発を行い、資源の早期造成を図ることを検討する。

## 2. 研究方法

移植放流に供した親貝は、平成18年4月24日に益田市漁協へ水揚げされた天然貝を購入し、全個体に標識を装着したものである。標識にはディスク型タグならびにプラスチック・チップ（ピンク色）を用い、接着剤（商品名：アロンアルファ No. 232）にて装着した。移植放流は、平成18年7月7日に親貝4,448個を多伎地先水深5mの海域へ行った。放流貝の大きさは、殻長37～76mmであった。このほか、陸上水槽飼育中に産卵した卵のうについては、ポストバック方式により放流地先岩礁に設置した。供した卵のうは湿重量で18kgあった。

親貝の生残状況また分布状況の把握を行うため、移植放流1、3ヵ月後にかご調査を実施した。試験操業に用いた籠は、直径50cm、高さ15cmの三度笠タイプ（目合25mm）を延縄状に連ね、1連50籠とした。籠の中に入れる餌は冷凍アジを用いた。籠の浸漬時間は22時間とした。さらに移植放流海域において本種稚貝等の食害生物の生息状況を把握するために、桁曳き調査を実施した。調査ラインは水深5、10、15、20mの各水深帯に設け、各ライン10分の曳網を2回行った。

## 3. 研究結果

### (1) 移植放流後の追跡調査

移植放流1ヵ月後の調査で487個、3ヵ月後の調査で456個のバイが採集され、このうち平成17年発生群と思われる稚貝が24個採取された。今までの調査において、当海域での産卵が確認されており、さらに今回僅かではあるが稚貝が採取されたことから、親貝の移植放流が当海域での再生産に寄与していることが窺えた。

### (2) 食害生物調査

今回の調査では魚類、軟体動物など49種の生物が採集された。このうち本種の食害種として考えられる生物はツメタガイ、テングニシ、ヤツデスナヒトデの3種であった。テングニシについては、かごによる追跡調査の際、かごの中で本種を攻撃しているのが確認されており、移植放流の効果を高めるためにはこれら食害種の駆除も必要であると考えられる。